
テレサとマリア

齊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テレサとマリア

【Nコード】

N2919Y

【作者名】

齋

【あらすじ】

GUNDAMと呼ばれる戦闘機械のできた世界。そんな世界に関わりを持つトウヤ・テレサ、ルナマリア・ホークを中心に広がる物語。

ルナマリアがデレ過ぎな感じなので嫌な人は読まない方が良いでしょう。

Z A F T c o d e 1 0 1 (前書き)

はじめましてかな？齊です。

ルナマリアとの恋愛ものが見つからなかったので自分で書いてみた自己満足作品。ですから、面白いものではないかもしれませんが、読んでいただけると嬉しいです。

それでは、ガンダムSEEDdestinyの世界へご案内。

天「二人の女の子がショップから買い物を買わせて出ていったところからこの物語は始まる。」

ルナマリア side

ル「なんだか今日はやけに騒がしいわね」

メ「今日転属してくる人がいるからじゃないかな？」

ル「転属？」

メ「あれ？お姉ちゃん知らなかったの？噂だけどころかなりイケメンでお金持ちらしいよ。」

ル「イケメンねえ…。」

メ「どうかしたの？」

ル「いや、イケメンでお金持ちって、絶対嫌なやつじゃない。親の七光りってやつ？お金の力で何でも解決しようとするし、その上イケメンって絶対たらしじゃないの。次から次に女を乗り替えてくような最低なやつに決まってるわ。」

メ「うーん。どうなんだろ。お姉ちゃんがゆーことも一理あるけどそうと決まった訳じゃないし。」

ル「まあそうね。」

メ「お姉ちゃんは気にならないの？どんな人か。」

ル「別に私はイケメンとか興味ないし。」

メ「そうだよ。お姉ちゃんは男の人にあんま興味無さそうだし。でもザラ隊長は？」

ル「えっ！？ば、バカなことはいわないの！／／／」

メ「えー。何かあやしーな。それともやっぱりあの人？」

ル「あの人って誰よ。」

メ「え？もちろんトウ…」

ル「きゃっ！」

私がソフトクリームを食べながらメイリンの方を向き、歩いていると曲がり角で誰かとぶつかった。

そのまま後ろに倒れるかと思いきや誰かに支えられた。

？「大丈夫？」

ル「えっ？あ、はい。」

？「ならよかった。」

その人は帽子を被っていてサングラスをしていたから顔はわからなかったが声で男性だと分かった。

そのままその男性は私から離れた。

ル「あっ！！」

男「ん？」

ル「す、すみません 服にアイスが（汗）」

男「気にしないで。洗えば落ちるから。」

ル「い、いえクリーニング代払います（汗）」

男「本当に気にしないで。こちらこそ不注意でぶつかってしまっすまない（汗）」

ル「い、いえ完全に私の不注意です。」

男「とにかく俺は大丈夫だから。じゃあ俺、急いでるから。気を付けて帰りな、ル…きみ。」

ル「あ……」

メ「あ……」

メ「いつちゃったね。」

ル「…うん。」

メ「優しい人で良かったね。」

ル「ホント。転属してくるやつもあんな人だったらいいかもしれなのよね。」

メ「分からないよ？まだイケメンとお金持ちって噂しかないんだか

ら、どれくらいの階級の人が来るかは分からないし。」

ル「まあ…そうだけど。」

メ「とにかく戻る？」

ル「そうね。」

そうして私達は自分達の部屋のあるミネルバの兵舎へ向かって歩を進めた。

Z A F T c o d e i 0 1 (後書き)

人の焦りや笑いを表現させるのが難しいです。

(汗)

みたいなやつです。

付けたくなるけど読む方からすればつけない方がいいんだよなあ。

では次回またお会いしましょう。

Z A F T c o d e i 0 2 (前書き)

今回はあの男が出てきます？
お楽しみください

ルナマリア side

ミネルバに入つて少し歩くとシンと会つた。

シ「どこいつてたんだよルナ、探したんだぞ。」

ル「え？私に何か用でもあるの？」

シ「あいつから待機室に集合しろって命令だ！」

ル「んもう。アスランさんの事あいつなんて言っちゃ駄目よ。隊長は F A I T H。私達は赤だけど F A I T H じゃないんだから。」

シ「いいだろ、何だつて。」

ル「もう！」

シ「ルナには関係ないだろ。とにかく言うことは言つたから荷物すぐ置いて来いよ。」

ル「すぐ行くわ。」

そしてシンは待機室へと向かつていった。

メ「ほんと子供なんだから。」

ル「とにかく荷物置きに行きましょう。」

メ「うん」

そして私は部屋に荷物を置いてすぐに待機室へ向かつた。

待機室

私がつく頃にはシンとレイがもう待つていた。

ル「遅れちゃつた。」

シ「いいんじゃないの？まだあいつ来てないし。」

ル「えっ？アスランさんまだ来てないの？」

見渡してみると確かにアスラン隊長だけいない。

レ「ああ。まだ来ていないみたいだが、途中で見かけなかつたか？」

ル「見てないわね。」

シ「まったく！あいつが呼び出したのに何であいつがいないんだよ。全く。」

ル・レ「……………」

少しの沈黙が起きた。

すると、その沈黙を破るように扉が開かれた。

ア「すまない。艦長と話していて遅れてしまった。」アスラン隊長が入ってきた。

扉は開けられたまま。

シ「呼び出した本人が遅れるなんてホントになに考えてるか分かりませんよ。」シンは威圧するかのようアスラン隊長に言う。

ア「本当に突つかかる言い方しかできないやつだな。君は。」

シ「……………」

レ「艦長とのお話なら重要なことでしょうから、それは構いませんがなぜ召集されたのか、話の本題を聞かせてほしいのですが。」

ア「ああ、そうだったな。今回集まってもらったのはミネルバに乗る人員が一人増えるためだ。」

レ「新しく転属してきた人ですか？」

ア「ああそうだ。」

そっか転属して来た人私達と同じでミネルバに乗るのか。まあ…どんなやつだか。

Z A F T c o d e 1 0 2 (後 書 き)

アスランさん出てきましたね

次回は誰が出てくるんでしょうか。

次回に続きます

Z A F T c o d e i 0 3 (前書き)

今回で重要な人が出てきます

お楽しみください。

ルナマリア s i d e

ア「では、お入り下さい。」

?「だから、敬語やめろって。」

ア「す、すみません。ですが…」

私は入ってきたその人を見た瞬間に分かった。服は変わっていたけど、おそらく……間違いない。

ル「あ、あなたは…先程の!?!」

男「やあ、また会ったね。」

ル「あの時は本当にすみませんでした。」

男「だからいいって。久しぶりだからってここまで忘れられてたら哀しいもんだな。」

ル「はい?」

私にはどう言うことが分からなかった。

ア「紹介するよ。この人はSSSの特殊部隊GDMから転属されてきた、トウヤ・テレサ准将だ。」

トウヤ・テレサ准将?トウヤ・テレサ…トウヤ…トウヤ…トウ…

ル「あぁっ!!」

ト「久しぶりだね。ルナマリア。」

彼はサングラスを取って私に話しかけてきた。

ル「と、トウヤなの?…あなた本当にトウヤ…なの?」

何だかんだ目頭が熱くなってきた。

ト「どのトウヤのこと言ってるか分からないけど、俺はルナマリアの事覚えているから、ルナマリアが知ってるトウヤなんじゃないかな。」

私の目から頬に一筋の水が流れた。

ト「な、何泣いてんだよ(汗)」

ル「泣いてなんか無いわよ！」

私はみんながいるところで、更には久しぶりに再開した相手に涙を見せたくなくて、自分でもわかるくらい強がった。

すると、みんなが見てるというのに、トウヤが私を体で包んでくれた。

温かかった。懐かしい臭いがした。泣きたくなんか無いのに次から次へと涙が溢れてくる。涙に合わせていろんな感情、今まで思っていたこと、言えなかったことが込み上げてくる。

ル「もう…もう、会えないかと思ってた。」

ト「……………」

ル「一度会いに行っただけどもういなかったから。」

ト「ごめん。」

ル「知らなかったよ。」

ト「え？何が？」

ル「トウヤがああSSSにいたなんて。」

ト「ごめん…連絡のしよ様がなくて。」

ル「確かにそうだね。違う道を歩き始めたのが小学校の時だから携帯とかも持ってなかったしね。」

ト「うん。」

ル「でも、良かった…また会えて。」

私は少しの間温かさに浸っていた。すると、シンが話し掛けてきた。シ「あのさ、再開を喜ぶのはいいんだけどさ、お二人さんはどうい

う関係？恋仲？」

ル「ち、違うわよ！！！！」

シンが変なこと言うもんだから凄く否定しちゃったじゃない。

ト「単なる仲の良い幼馴染みだよ。」

シ「そうなんですか？でも単なる幼馴染みにしては抱き合ったりして過度じゃありません？」

ト「そうかもしれないな。でも久しぶりに会えたからおれも嬉しい

し、これくらい大した事無いんじゃないかな。」
シ「隊長もですけど、あなたも良く分かりません。」
ト「あはは。少しずつ分かっていってくれれば嬉しいよ。」
ア「とにかくだ。今日から俺達と友に行動をする仲間だ。協力して
いこう。テレサ准尉、何かありましたら申し付け下さい。」
ト「おいおいアスラン。トウヤでいいよ。敬語は禁止だ。他のみんなも敬語使わないでくれよ。みんなと早く打ち解けたいから。んじやよろしくみんな。」
そのあと、トウヤは隊長に連れられて部屋の場所を教えてもらいに行った。

Z A F T c o d e i 0 3 (後書き)

主人公であるトウヤ君が出てきましたね

私の作品でトウヤ君はとても大事なキャラクターです。
私が書く作品のほとんどに出てくるキャラクターです。
好きになってくれると嬉しいです

では次回またお会いしましょう

Z A F T c o d e i 0 4 (前書き)

今回ルナマリアが内心ちよいデレます。

ではお楽しみください

ルナマリア s i d e

ル「にしても、まさかトウヤが赤服で F A I T H になっているとはね。」

シ「また上官か…面倒だな。」

レ「しかし、 F A I T H が二人も同じ隊にいると何かと厄介だな。」

ル「そ、そうかもしれないけど、トウヤは大丈夫よ。」

シ「何が大丈夫か知らないけどまあいいや。」

レ「ルナマリア。シン。俺はもう部屋に戻る。」

シ「俺ももーどろつと。」

ル「じゃあ解散ね。」

私は二人と別れて部屋に戻ろうとした……

ト「おーい。ルナマリア。」

すると後ろからトウヤが声を掛けてきた。

ル「あれ？アスランさんは？」

ト「ああ。もう用事終わったから別れたよ。」

ル「ふーん。」

ト「あつ！そうゆーことか。」

ル「ん？どうしたの？」

するとトウヤはイタズラっぽい笑みを浮かべて言った

ト「アスランと一緒にじゃなくて悪かったな。残念だろ。なんならアスラン呼ぼうか？」

ル「え？ええっ！？ち、違うわよ！！わ、私は別にアスランさんじゃなくて…（トウヤさえいれば…）べつに…／／／／／／／／」

ト「まあ好きなら好きで隠す必要はないと思うけどな。自分の気持

ちに嘘つくのは良くないしな。」

ル「だから違うって!!!」

ト「……そうか。そういえば、メイリンちゃんどこにいるか知らない？確かメイリンちゃんもいるよね？」

ル「いるけど……メイリンになんかようでもあるの？」

ト「ああ。久しぶりだしあいさつと、ミネルバやザフト本部、それからここら辺のことまだ分からないから案内を頼もうかと思ってな。」

ル「……案内？」

私はトウヤが妹のメイリンを頼って私を頼ってくれなかったことが嫌だった。

ト「本当はルナマリアに頼もうとしたんだが。」

ル「え？私に？」

私を頼ろうとしてくれたんだ。

ト「ああ。真っ先に何かを頼めるのってルナマリアしかないしさ。だが疲れてるだろうしやめt……」

真っ先に頼りにしてくれたんだ。正直嬉しかった。

ル「いいわよ。」

ト「ん？」

ル「だから、いいわよ。案内してあげても。／／／」

ト「本当か！？助かる。嬉しいよルナマリア。ありがとう。」

ル「別にいいわよ。……けど……あのね……」

気になっていることがある。

Z A F T c o d e i 0 4 (後書き)

どうでしたかね。あのデレは不快でしたかね？もし不快ならすみません、これからもこのまま行こうと思っています。

感想も待っています。

ではまた次回会いましょう

Z A F T c o d e i 0 5 (前 書 き)

またまたルナさんツンツンデレデレです

ではでは。

ルナマリア side

ト「ん？なんだ？」

ル「あのさ、最初から気になってたんだけど…なんで呼び方…ちがうの？」

ト「呼び方？」

そう、ずっと気になっていた。

ル「ルナマリアって呼び方。小さい頃はルナって呼んでくれてたのに…」

ずっとずっと気になっていた。なんか『ルナマリア』って呼び方されるとトウヤとの距離が一気に遠くなった気がする。だから嫌だった。

ト「会ったの本当に久しぶりだし、久しぶりに会ってそうそう馴れ馴れしくルナなんて呼ぶのは良くないかと思って。そんな馴れ馴れしく呼んで気付かれなかつたら嫌だったし……」

ル「なんだ、そんなことだったのね。」

ト「俺にとってはそんなこと程度の心配じゃないんだって。」

ル「それで、その理由で、私のことルナマリアって呼んでたの？」

トウヤは照れくさそうに顔を背けて言う

ト「ああ。」

ル「メイリンのことも？」

ト「そっちも気付いてたのか？」

ル「当たり前じゃない。トウヤがメイリンのことメイリンちゃん何て呼んだからおかしいと思ったわよ。」ト「なんでもお見通しだな、ルナマリアは。」

ル「誰がお見通しだった？」

ト「ルナが。」

やっと呼んでくれた。普通に呼ばれたただけだけど凄く嬉しいもんよね。顔には出さないけど。

ル「んん？聞こえない。」

ト「やっぱりルナは俺のことなんでもお見通しだなんて言ったんだよ。…ルナわざとやってるだろ？」

ル「さあ、どうでしょうね。」

もちろんわざとに決まってるじゃん。

ト「楽しそうだな。」

ル「そう？」

ト「うん。でも元気そうで良かったよ。」

ル「私はいつでも元気よ。ところで私のこといつから私だって気付いてたの？」

ト「？ああ、そんなの最初服にアイスのメーカーを付けられた時から。」

ル「メーカーって…悪かったわよ…」

ト「だから気にすんなって。こんなの単なる笑い話だって。もうこの事で謝ったり落ち込んだりするの禁止な。」

ル「でも…」

ト「いつものように『あんたがぶつかってきたのが悪いのよ』とか言っとけばいいんだよ。」

ル「わ、わたしそんなこといってないわよ…」

最後まで言わせてもらえなかった。トウヤが私の口に人差し指を立ててきたからだ。

ト「たまにはそんな落ち込んだルナも可愛いけど、俺は元気なルナが好きだぜ。」

私は自分でも分かるほど顔が…

ト「どうした！？顔赤いぞ！？無理しすぎだろ。医務室に行こうか？」

ル「だ、大丈夫 そんなんじゃないから／＼／」

ト「無理するなよ？今日じゃなく明日にするか？」

ル「大丈夫だつて。それより、あのときもう既に気付いていたってことよね？」

ト「え？あ、ああ。」

ル「よく分かったわね。」

ト「まあな。来る前からルナやメイリンがいるってことを聞いていたからな。」

ル「知ってたの？」

ト「知ってたよ。だからZAFＴに来てルナ達に会うのが楽しみだったしな。」

ル「そうだったんだ。楽しみにしてくれてたんだ、私達に会うこと。」

ト「ああ。そしたらZAFＴに行く前に会えたと驚いたよ。」

ル「あはは……でもいるって情報だけであんだけ会ってなかったのによく私達を見抜けたわね。」

ト「まあ……その……なんだ、そりゃわかるよ。相変わらず二人とも可愛かったからな。あれ？いや……綺麗だったから……だな。」

ル「よくそんな恥ずかしいこと平気で言えるわね。もしかして言い慣れてる？」ト「ばっ、平気でいつてなんかいいえよ！／＼しかも言い慣れてなんかいいえよ。ルナ達に言ったのが初めてだ！／＼／＼ル「へ、へへえ／＼／＼そうなんだ／＼／＼まあ一応信じてあげるわ。」う、嬉しいこと言ってくれるじゃない。計算していつてるの？もしかして。」

ト「と、とにかく、案内頼むな。」

ル「じゃあどこから案内しようかなあ。」

私はどこから案内するか考えた。

Z A F T c o d e i 0 5 (後書き)

案内開始です

次回はどうなるでしょうかね。齎でした。

ではまた次回。

Z A F T c o d e 1 0 6 (前 書 き)

それぞれの部屋の名前なんて知らない！だから適当

キャラクターも結構変えちゃったかもなあ……大丈夫かなあ？

お気に召さなかったらすみません？

ではごーぞ。

ルナマリア side

ル「そうね…じゃあまず船長室に行く？」

ト「もう何度か行ってるから。そこ。」

ル「分かってるわよ。じゃあ…指令室にでも行く？」

ト「そっぴゃあ行つてないな。頼めるか？」

ル「ええ。」

私が先導して指令室へ歩いた。

ル「ここよ。」

私は扉を開いた

ト「へえ〜。結構広いんだな。」

ル「そうかしら。まあ普通の戦艦よりは広いかもしれないわね。」

ト「ルナはよく来るのか？ここ。」

ル「基本私は来ないわね。メイリンは毎回ここだけ。」

ト「そうか。メイリンはもう実践のオペレーターかあ。すごいな。」

ル「まあね。」

ト「ルナも凄いけどな。」ル「え？」

ト「だって女の子で専用のモビルスーツ持つてる人なんてルナくらいだろ。しかも赤服だしな。」

ル「ま、まあ頑張ったからね／＼／＼そうゆうトウヤだつて凄いじゃない、ただの赤服よりも上のFAITHでしょ？凄いわよ。」

ト「何で俺がFAITHになれたのか分からないよ。俺はFAITHになるうとして頑張っていた訳じゃない。大事な人、みんなを守る力が欲しかっただけなのに。しかも戦わないのになぜこの称号が与えられたのか不思議だよ。」

ル「え……？」

今の私にはトウヤの言ったことがよくわからなかった。『戦わない』
と言う意味が…

ト「ごめん、こんなネガティブな話をしてしまって。次の場所へ案内
お願いできるか？」

ル「へ？あ、うん。」

他にもミネルバの中のいくつかの場所を案内してから次に休憩室に
向かった。

休憩室に着く直前にウイーン・デュプレとヨウラン・ケントの話
し声が耳に入った。

ヨ「そついやあ、今日一人、近いうちにもう一人ミネルバに転属し
てくるんだろ？」

ヴ「そうなのか？」

ヨ「は？おまえ…今日一人転属してくることは…知ってるよな？」

ヴ「ううん、知らない。」

ヨ「おいおい、ちゃんと話聞いとけよ。話によるとFAITHらし
いぜ、二人とも。」

ヴ「ええ！？まじかよ。」

ヨ「ああ。FAITHが三人も。どうなるんだか、ミネルバ。」

ル「……………」

私はトウヤの方を見た。

ト「……………」

ル「あ、あのさ……………」

ト「やっぱりオレ必要なかったよな……………」

ル「そんなことないわよ。私はトウヤが来てくれて良かったと思っ
てるんだから。」

ト「ありがとう。ルナ。」

ル「……………いいから行くわよ。」

ト「ああ。」

もう、あの不意打ち笑顔、変わってない。ううん、ますます…その
……………

私達は休憩室に入った。

Z A F T c o d e 1 0 6 (後書き)

キャラ変えすぎかな？

次回はみんな好きかな？ルナの妹さん出てくるかな？

妹さんもちろんキャラ変わってるかもです。すみません。

ではまた次回。

Z A F T c o d e i 0 7 (前書き)

今回はメイリンのキャラ崩壊です。すみませんすみません。

ではそれでもいい方のみお先へお進みください。

ルナマリア side

メ「あつ、お姉ちゃん、と…」

ヴ「だれ？」

ヨ「さ、さあ…」

メ「お姉ちゃん、その人は…」

メイリン気付かないんだ。

ル「え？ああ、この人？」

メ「もしかして、その人が新しく配属されたって人？」

ル「あ、うん。」

ヨ「なんだよ、七光りだっけ？」

ヴ「ああ。メイリン曰くルナマリアが言ってたんだろ？新しく来るやつはどうせ七光りで女たらしだって。」

あ、あんた達何てこと言うのよ！？まさかトウヤだと思ってなかったのよ！

ル「あ、いや、ちがつ…」

ト「俺はルナに七光りの女たらしの最低なやつだって思われてたのか。うろう…」

悪のりして泣く真似とかしないでよお。

ル「ち、違っつて。トウヤって知らなかったから！」

メ「トウヤ？」

ル「え？あ、ああ、この人は今回SSSのGDMから転属され、ミネルバに配属されたトウヤ・テレサ准将よ。」

ヨ「げっ、じゅ、准将かよ…」

ヴ「准将ってどれくらいの階級？」

ヨ「アスラン隊長より上だよ……」

ヴ「それってすごい人って……こと？」

ヨ「あ、ああ……」

ト「隔たりを作るのは嫌いでね。気軽にトウヤとでも呼んでくれ。」

メ「あ……」

メイリンが私の方を見てきた。私は頷いてあげた。おそらくこれで分かるはず。

メ「あの……」

ト「ん？どうかした？」

メ「その……トウヤお兄ちゃん……ですか？」

ト「ああ。忘れてるかと思ったよ。久しぶり、メイリン。」

メ「トウヤ……お兄ちゃん……う、うう……。」

ト「大きくなったな。」

あ！トウヤのやつ私だけじゃなくメイリンも抱き締めてる。なによ……誰にでもやるのね。

メ「だつてずっと会って無かったんだもん……前、お姉ちゃんと会いに行ったけどいなくて、もう……会えないって思ってた……」

ト「ごめんなメイリン。」

メ「いいよ……またこうして会えたから。でも、もう一人で勝手に私やお姉ちゃんの前からいなくなっちゃだよ？」

ト「ああ。もうどこにも行かないさ。君たちをおいて居なくなったりしない。」

メ「そつか。よかったあ。約束だからね。」

ト「ああ、約束だ。」

メイリンもトウヤもニコニコしちゃって。もう……

Z A F T c o d e i 0 7 (後書き)

どうでしたか？

あの呼び方ずっと続くわけじゃありませんからね。

流石にメイリンもトウヤもあの年になったら恥ずかしいでしょうし
書いてる私も少し…／＼／

では

t o b e c o n t i n u e

Z A F T c o d e i 0 8 (前書き)

／／／などの人によっては嫌いな表現が多々ありますが、お気を悪くしないでこれからも読んでほしいと願います。
それではGOです

ルナマリア s i d e

メ「じゃあ、これからもよろしくね、お兄ちゃん。」

ト「ああよろしく。」

ヴ「何かルナマリアの機嫌悪くない？」

ヨ「みたいだな。鬼だな、鬼。」

誰が鬼よ。

メ「そろそろ落ち着いたらから大丈夫だよ。」

ト「そうか？なら良かった。」

メ「それに、もうそろそろ離れないとお姉ちゃんの機嫌がどんどん悪くなっていつて大変なことになっちゃいそうだしね。」

メイリンが私の方へ顔を向けて言ってきた。

ト「？」

ル「め、メイリン。あんた何変なことを言っ…」

メ「それにしても、相も変わらずお兄ちゃん温かいね。ね？お姉ちゃん。」

ル「へ？わ、私は別に…」

メ「ねえお兄ちゃん。お姉ちゃんはお兄ちゃんの胸に飛び込んだんじゃないの？」

ト「いや、今みたいに一方的に俺が抱き締めただけだな。だから嫌な思いさせてたら悪いなあ…」

ル「べ、別に私は嫌な思いなんて…温かったし…むしろ…って何でもない…」

メ「大丈夫！お姉ちゃんは照れてるだけだから。ホントは嬉しいんだよ。だから嫌がつてるなんて絶対ないよ。」

ト「そうか？ならいいけど。」

ル「ああもう！」

ヴ「あのさ…その人ってメイリンのお兄さんなの？」

ト「あ？いや…」

メ「違うよ？」

ヴ「じゃあ何でお兄ちゃんって呼んでるのさ。」

ル「小さい頃の幼馴染みのよ、私達三人は。で、私と同じ歳だしメイリンからしたらお兄ちゃん的な存在だったから、小さい頃メイリンはそう呼んでたのよ。」

ト「まだ、そう呼んでくれて嬉しかったよ。」

それから少し話して私とトウヤは外を案内するために艦長室へと向かった。

メイリン side

お姉ちゃん達行っちゃったなあ。私も着いていきたかったけどお姉ちゃんの邪魔はしたくないし。

ヨ「にしてもメイリンがああ転属してきたやつをお兄ちゃん何て呼ぶなんてな。」

ヴ「確かに。全く予想外だよ。」

メ「いや、あれは違うよ…／＼／＼」

ヨ「何が違うんだよ。姉妹で取り合いか？あのお兄ちゃんを。」

ヴ「お兄ちゃんさんは行っちゃったけどいいの？着いていかないで。」

メ「もう、それ以上からかわないですよ。着いていたら邪魔になっちゃうじゃない。」

二人はニヤツとした。

ヨ「お兄ちゃんおかえりなさい。」

ヴ「ただいま。メイリン。」

ヨ「お兄ちゃん」

ヴ「メイリン」

メ「もうやめてってばああ！！！！」

その後私は一人にからかわれた。

Z A F T c o d e 1 0 8 (後書き)

メイリンが冬弥をお兄ちゃんって呼ぶの
何か違和感があるなあ

では次また会いましょう

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2919y/>

テレサとマリア

2011年11月22日03時59分発行